

茅風



— Breeze from the field of thatch-grass —

2005年3月15日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信 13号



このひとだあれ？

雪はこぶ友らの
笑顔やわらかき

良子

— 今号の目次 —

■冬の水上・雪中フィールドスタディ

○野焼きの地元・打合せを振り返って／池田登・・・1

○雪のわくわくランド・ふじわら／山本誠次郎・・・2

○藤原小・中学校訪問記

—驚きの「藤原学」!!—／川端英雄・・・2

○かんじきでかんげき!!／高橋志津子・・・・・・3

○雪原「かんじき」フィールドスタディ／海老澤秀夫・・・・3

○雪中フィールドスタディに参加して／佐藤真紀子・・・・5

■阿部惣一郎さん、上毛新聞“ピーぷる”に登場!!・・・5

■論文紹介 三井昭二先生

「入会林野の歴史的意義とコモンズの再生」・・・・・・6

■今後の活動予定・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

■編集後記 一塾長のつぶやき—

■冬の水上・雪中フィールドスタディ（森林塾第7回フィールドスタディ）

○ 塾のメインイベント「野焼き」の地元・打合せを振り返って

池田登

新年初のフィールドスタディとしての「野焼き」の時期となり、2月19日（土曜日）の夜、地元の皆さんと打ち合わせを行いました。

40年振りの第1回野焼き体験の問題点を踏まえ、民宿「上ノ原山の家」に雲越万枝、月岡区長、阿部惣一郎、林久、林三郎の各氏を迎え、塾員ならびに町当局、計20名弱と、和やかな雰囲気の中事前打合せが進み、次の事柄が案として決定しました。

1. 日程；4月23、24日に予定のフィールドスタディの第1日目とする。（予備日は4月16、17日とし、雪解けの状況等を判断材料に4月初旬に最終決定する。）
2. 時間；午後3時以降（気温が下がり、なおかつ夕方で薄暗くなり残り火や飛び火が確認しやすい）
3. 場所；山側から見て、左側斜面（東）で、管理道より上側。面積は昨年より広く。山側、昔の防火帯と思われる所より下部約20M巾を事前に焼き、防火帯を作っておく。
4. 態勢；火消し役等、より多くの参加者が必要となるため、塾員、地元が最大限の努力を惜しまず動員に力を入れる。（目標＝50人以上）
5. 実施後、参加者による反省会的な懇親会を催す。

まだまだ細かい打合せが何度と無く必要となりますが、今回お互いに以上を確認しました。スキーシーズンでお忙しい中、打合せに参加いただきました地元の皆さまに、心より御礼申し上げます。

昨夏、森林塾青水に入れていただいたのですが、会員の方々にお会いしフィールドに行きましたのは、納会の時が初めてでした。

新年去る2/19～20の冬の水上「雪中フィールドスタディー」にはわくわくして出掛けました。

雪掘りと雪原かんじき散策は、今回腰痛のため控えましたが、その他は何もかも大満足。それほど寒くもなく、とても楽しい2日間でした。計画を立ててくださった方々、指導してくださった方々、幹事、現地の皆様有難うございました。心からお礼申し上げます。

あのような雪は、初めての経験です。水上の一年をこれから皆様のお蔭で気安く、体験できると思うととても幸せになります。よろしくお願いいたします。



○ 藤原小・中学校訪問記 ―驚きの「藤原学」!!―

川端英雄

真っ白い雪原にいくつもの足跡がつけられてゆく。足跡は、ひと気のない雪原を横切ってこれまた森閑として音もなく、冷たく冷えきっているであろう建物へ続いていく。建物の屋根にはてんこ盛りの雪。怪獣の牙のようなつららが何本もぶらさがっている。玄関の上にある大きな時計の針が、いつその動きを止めたのか8時50分を指したまま凍っている。「雪中フィールドスタディー」の初日、腹ごしらえを済ませた塾員たち19名は、藤原小学校にいった。土曜日、約束の13時より早めに着いたせいか、玄関のドアには鍵がかけられている。校庭、樹上、屋根に積もった雪をじっくり堪能する。

鍵あけと校内案内のために、わざわざ休日出勤をしていただいた高橋道明校長が、小学校の歴史と由来についてひとくさり。質問あり。「先生は何代目の校長先生ですか？」校長。「?????」何代目かを意識しないのが最近の教員世界での常識なのだろうか、はたまた在校生12(?)名の軽量学校のゆえ意識をしないのか。往時、應永寺内に創設された(と藤原小学校内の石碑に記されていた)小学校にはなかったであろうボイラーに暖められて、ここ校長室はぬくぬくと暖かい。

「複式教育」とやらで、いくつかの広い教室にはわずか数名分の机といすが2列になって並んでいる。きっと、後方が高学年生なのだろう。戦前の小説にもこんな授業風景が描かれていたことを思い出したけれど、「複式」とは初耳。呼び名変わっても、かたち変わらず。工作室、美術室など特別室がいくつもあったが、一室にスキー道具が並んでいたのはさすが雪国ならではの。

盛時に建築された校舎と児童数のアンバランスが、過疎地のイメージとはうらはらにたいへん豪華に感じたのはわたくしひとりの印象だろうか。同じ敷地にありながら雪の壁に隔てられ、雪道をひとまわりして藤原中学校へ。見上げれば、校舎の屋根裏

に作られていたツバメの巣が、ことごとく人手によりこわされている。何かこわさねばならない事情があったのだろうか。

校舎に入り、飯塚忠男校長のお出迎えを受ける。そして、本日のメインテーマ「藤原学」の学習にはいる。まだ若い雲腰誠司先生が本校の中学生全員(といっても現在は8名だが)とともに、5年間を費やして藤原の自然・暮らし・歴史・民俗・伝統・信仰・芸術・伝説などを「藤原学」として5冊の本・ビデオなどに集大成。森林塾青水の今年の事業課題＝地域資源調査とまさにオーバーラップ。

「人間ってすばらしいなあ」と感じるのはこういつたとき。だれに言われるまでもなく、報酬を求めるのでもなく、「ふじわら」の地の神々が黙ってわれわれに要求してきたことを、いともさりげなく実現させてしまう。そのインスピレーションと執念に脱帽。

地の神のご加護か、富田さんが師事されている染色家の志村ふくみさん(人間国宝)の草木染めの作品が、雲越先生がうやうやしく捧げる桐箱の中からあらわれる。過去に藤原中学校と交流があったとのこと。予期せぬできごとに富田さん「国宝級の地域資源が眠っていた!」と大感激。縁は異なるもの、味なもの。

過疎化あるいは合併により、この小中学校はいずれ廃校を免れないだろうが、森林塾青水として130有余年ここで藤原文化の灯をともしてきた両校を何らかの形で残してゆきたいもんだ。



8時50分を指したまま眠っている時計!!

どこまでも続く雪野原となった青水の森にかんじきを履き、第一歩を踏み入れました。ギシッ、ギシッ、ギュッ、恐る恐る出した足が抵抗なく雪原に受け入れられ、雪の上に浮いているようです。なんと心地良いことでしょう。更に一步、又一步と先輩の後を追い、目標地点に到着。向かいのゲレンデには蟻のようなスキーヤーが滑っています。ふと見ると、兎のような軽やかな足取りで阿部惣一郎さんが登ってきました。まるで悪戯っ子のようにです。

惣一郎さんが作ってくれたカンジキで雪原を闊歩!!し、雪掘り体験の日「気ママ屋」さんのシココ、モチモチ、手作りのホッカ、ホッカの肉まんあんまんを食べ、胸いっぱいの日二日間でした。

○ 雪原「かんじき」フィールドスタディ

海老澤秀夫



私たちの上の原はこの時期、たくさんの雪に埋もれているはずですが。

「3メートルはあるんじゃないの？」

藤原の人はそう言います。でも百聞は一見に如かず。五感で「スタディ」してみようと20日の朝、役場の鈴木さんが運転するワゴン車と木村さんの自家用車に分乗して現地へ向かいました。道路が除雪されているのは武尊山登山口の看板のところまで。ここで車を降り、本日の先生役をお願いしている地元の惣一郎さんと広川さんに合流。カンジキの履き方を教わって、私たちはそろそろと上の原の雪原へ足を踏み入れたのでした。

脱兎のごとく

上の原は小雪が舞っていました。気温は氷点下でしょうか。しかし凍えるほどではありません。それに、カンジキで歩いていると、身体が火照って汗が出てきます。

雪面はしっかりしていました。体重52キロの私の場合、カンジキが20センチくらいもぐるだけ。歩きやすい固さです。雪の上にはウサギの足跡もついています。へこみ具合からすると、体重はふんわり軽そうです。恐竜の足跡の化石から、その恐竜の体重がわかるといいますが、この場合も専門家なら、「体重は約△△キロ、足跡の大きさからして子どもではない…」などと分析するのでしょうか。

ウサギの足跡は、前後で大きさと形がずいぶん違

います。

前の方には、スリッパのような形をした細長い足跡が、ふたつ平行に並んでついています。その後ろには、小さくて丸い足跡が、ふたつ前後に並んでいます。しっかり形がわかるので、きっと今朝歩いた跡なのでしょう。この足跡の形から思い浮かぶのは、ピョン、ピョン、と「ウサギ跳び」で雪原を駆け抜けていくウサギの姿です。

ところでウサギの足ですが、後ろ足の方が大きくてスリッパのような形をしているのをご存知でしょうか。惣一郎さんが言いました。

「前の方の大きいのが後ろ足、後ろの小さいのが前足だね」

つまり、こんな具合なのです。

ウサギは飛び跳ねていくとき、まずスリッパのような後ろ足をそろえてピョンと飛び、小さな前足を前後に並べて着地します。同時に後ろ足を前足の前につき、またピョンと飛び跳ねていくのです。そのため、ウサギの足跡は前後が逆になっているのです。そして、跳ねるスピードが増すほど、足跡と足跡のあいだは間隔が離れます。キツネにでも追われたもんならそれは大変で、前足と後ろ足を前後に交差させ、脱兎のごとく空中を飛んでいくことでしょう。



私たちが見た足跡は、それほどせっぱ詰まったものではなさそうです。ピョン、ピョン、ピョン、ピョン、ピョン。ちょっと立ち止まってはフンをして、赤い目で灰色の空を見上げたり、朝からスキーに興じる人間の気配に耳を立てたり、そんな感じだと思います。

もうひとつ、形のちがう足跡がありました。前後の2組の足跡が、それぞれ斜めに並んでいます。これは、ゆっくりピョン、ピョンと歩いている足跡です。雪原から頭を出している木の皮でも探して食べようか、といったところでしょうか。



灰色のウサギが走った

ウサギの穴も見つけました。倒木に雪が降り積もり、その中にできた“うろ”のトンネルです。フンがたくさん落ちていました。ここで寝ていたのでしょうか？少し危険な場所のような気がします。雪原を歩いているときの一時待避の穴かもしれません。キツネに追われたウサギがトンネルの一方の穴にピョーンと飛び込み、キツネがそこに鼻をつっこんでいるあいだに、もう一方の穴からまんまと逃げるといふ寸法です。ほんとうにそうなら、そんなシーン、見てみたいものです。

私と広川さんは、ちょっと別行動をして、ミズナラ林の中腹まで登ってきました。「下ばえがないから歩きやすい」と広川さんにそそのかされたのですが、なかなかの急斜面、けっこう大変でした。「止せばよかったなあ」と少々後悔しかけているところに、「あ、ウサギ」という広川さんの声に振り向くと、灰色の大きな野ウサギが、ミズナラ林の谷を駆け抜けていく姿が見えたのでした。いやあ、よかった。広川さんに感謝です。このウサギ、私たちがドヤドヤとやって来たので、雪原の穴から逃げ出してきたのでしょうか。雪の中のウサギは「白」だと思いますが、この場合は「灰色」。冬の樹林がどちらかというと灰色だからでしょうか。

「熊棚」も教えてもらいました。ミズナラの枝がボキボキ折られているのですが、クマが木に登って枝を折り、座り込んでドングリを食べた跡です。

「この辺にはクマがうようよいる」

広川さんがうれしそうに言いました。

目覚めよと冬の声がする

上ノ原の積雪、実際にどれくらいあるのだろうか、それを確かめるべく、私たちが雪原を歩いているあいだ、せっせと雪を掘っていた人がいました。1時間以上かけたのではないのでしょうか。雪原のまんなかに深い雪の穴ができていました。

「2メートル65センチ」

メジャーもないのにどうやって計ったんだろうと、一瞬思いましたが、だいたいそんなものでしょう。地元の人も「3メートル」と言っていました。

積雪は、下の方にいくほど固くしまっています。固まった雪は、新雪の何十倍もの重さになるので、雪を屋根に降り積もったままにしておくと大変なことになるのです。じっさい、上の原に積もった雪は、1平方メートルでどれくらいの重さがあるのでしょうか。仮に、上の原の雪の平均比重を0.3としてみましょう。これは、水の比重の0.3倍という意味です。

$0.3 \text{ グラム} \times 265 \text{ センチ} \times 10000 \text{ 平方センチ}$ (1平方メートル)

という計算をやると、1平方メートルあたり「795キログラム」という結果になります。「重たい」の一言です。雪の下には埋もれたくない重さです。

穴を掘ったかたわらには、ハリギリというトゲトゲの木が生えていました。冬芽はさわるとまだ固いのですが、心なしか“芽”を開きかけているような気がします。そうなのです。じつは木々の冬芽はすでに目覚めているのです。前の年の夏ごろから育ちはじめた冬芽は、秋には休眠しているのですが、やがて冬の寒さに一定期間さらされると、「ああ、この寒さは冬の寒さだ。冬来たりなば春遠からじ」というわけで秋眠から目覚め、冬の次に必ずやってくるであろう春に備えるのです。

私たち一行の何人かは、ミズキの小枝を手折って持ち帰りました。暖かい部屋に置いとくと芽が開く、上の原の春を先取りしたい、というわけです。人間は何とわがままなのでしょう。いずれにしても、これはミズキの冬芽がすでに目覚めているからこそ可能なことなのです。





2 m65cm の穴の中!!

森林塾のフィールドに雪の時期に身を置けるなんて、とても素敵!と、お誘いをいただいてから、毎日「行きたい」思いを募らせていました。都合がつかず一度は断念したものの、どうしても心惹かれ、思い余って?数日前に清水さんをお願いしたところ、夜からの参加という無理なお願いをお聞き届けいただき、また、広川さん、木村さんをはじめ、皆さんに大変お世話になり、参加させて頂きました。

「男前」、「さだまさし似」の2つの言葉が、お会いして初めて合致した広川さん。往きの車の中でのお話や語句に、森林への愛情や、樹木を扱うお仕事、今の生活への愛情を強く感じ、そして恐らくこれまで日本人が大切に守ってきたものが失われつつあることへの怒りもひしひしと伝わってきました。私の森林塾は、塾頭の熱い洗礼でスタートです。

宿に着いて、遅めの夕食を頂いていると、顔をひょいと出された方がいらっしゃいました。太陽と笑顔と藤原のお仕事によって造られたであろう魅力的な笑顔と素敵な“しわ”の持ち主、この方が惣一郎先生でした。その笑顔に地元の方にお会いすることへの期待が高まります。

期待が高まる中、野焼きの打合せに参加。ここでは、森林塾の方々と地元の方が、大切なものを生み出すために、ひとつひとつ確認し、計画を詰めていかれている様子を拝見しました。そして、これまで、清水さんをはじめとする森林塾の皆さんが、地元の方を知り、その理解を得つつ、一步一步着実に進めてこられた軌跡を思い、また、地元の方もそれに応えて歩み寄って下さり、そうして日本の大切な伝統が伝わっていく環境が作られてきたことを知りました。

2日目の午前、かんじきを履いての雪原散歩。美しい弧を描いて曲げられた枝と、硬くきっちりと巻かれた紐と針金に感嘆しつつ、かんじきを履きま

した。「あの空から降ってくる白い雪がたくさん降り積もって作られた雪原なんだな」と不思議な感覚を抱きつつ、雪上へ。地上3メートルの真っ白な雪原を歩く楽しさはやはり格別でした。一步一步ワクワクどきどきしながら歩いてみたり、かわいらしいうさぎの足跡にうさぎが飛ぶ姿を想像してみたり。立ち止まって視線をあげると、近くの木々と遠くの森の間に雪がちらちらと舞って、あまりに美しく、野うさぎしか見られない風景を見せていただいていることに畏れを感じたりもしました。その景色はとても静かであたたかく感謝の気持ちで一杯になりました。さらに、地上3メートルのところにある枝には、もう春の用意ができていて美しい赤銅色の芽にも出会えたことも幸せでした。

お昼は、地元の若いお母さん御父さんたちが、子供達と一緒についたお餅をいただきました。つきたてのお餅なんて、めったにいただけませんが、そのお米も実は赤米と黒米で、2000年以上前から食されてきたものの子孫とのこと。長い年月をかけて伝えられてきたお米と、お米を伝えてきてくださってきた多くの人の「手」に感謝しつつ、元気一杯の子供達といっしょに美味しくいただきました。

1日にも満たない滞在時間でしたが、たくさんの幸せな時間をいただきました。最後になりましたが、同室の素敵な女性の方々、(富田さん、岡田さん、高橋さんのお三方=編集人・注)その他参加された皆様方にお礼申し上げます。

■阿部惣一郎さん、上毛新聞“ピーぷる”に登場!!

「かんじき」を手作り
阿部惣一郎さん(72)
上毛新聞 上毛新聞

今冬、昔ながらの「かんじき」を六十七組で作り、雪上散歩が楽しめるか、雪が積もった屋根や急な傾斜などを上るには、やはりかんじきが一番、という地域の人の声に応える形で作り始めた。

「かんじき」の作り方は、雪上散歩が楽しめるか、雪が積もった屋根や急な傾斜などを上るには、やはりかんじきが一番、という地域の人の声に応える形で作り始めた。

自給自足の知恵知って

定作物産直売所での販売を考えている、地域の人は、阿部さん

「かんじき」を手作り、雪上散歩が楽しめるか、雪が積もった屋根や急な傾斜などを上るには、やはりかんじきが一番、という地域の人の声に応える形で作り始めた。

昨年の学習会で、ご指導をいただいた三井先生が、『森林環境』2005（発行＝森林文化協会）の〈特集＝地域再生と森林の力〉に掲載論文を発表されました。大いに示唆に富む内容である上に、当塾の活動を今後のあるべき方向性を示す事例として、紹介していただき、かつ、ご期待をいただいております。抜粋ですが、ぜひご一読下さい。

又、全文をお読みになりたい方は、海老澤幹事（森林文化協会 E-mail:ebisawa@shinrinbunka.com TEL03-5540-7686）までお申し込み下さい。『森林環境』が定価2,100円の20%引き1680円でご購入いただけます。（清水）

熱帯林の減少が依然として深刻であるのに対して、日本の森林蓄積は大幅に増えていて、日本の森林は一見豊かそうに見える。それは国産材が売れないためである。したがって、林業経営は底のみえない危機的な状況に陥っていて、人工林の手入れが行き届かず、近年では皆伐跡地の造林放棄地が激増している。また、かつてはエネルギー源としてなくてはならなかった里山の雑木林も、久しく人手が入らず、荒廃の色を濃くしている。

そのようななかで、1980年代の中葉から、従来の自然保護とは異なる形で、「森林ボランティア」として森林とかかわろうとする人たちが登場した。近年ではそのような人たちが激増し、市民による森林管理が政策的な検討課題ともなってきた。また、いわゆるNPO法の制定(1998年)は、企業などの「私的(private)セクター」や政府などの「公的(public)セクター」とは異なる「共的(common)セクター」の役割を改めてクローズアップさせている。

日本の森林管理の歴史をふりかえると、共的セクターとしてのムラ(現在の集落)の役割はみすごせない。江戸時代には、里山の多くはムラによって管理される入会林野であった。そこでは、生活を維持するために、多様な産物利用と持続的な管理が行われていた。

本章では、このような入会林野とムラ社会について概観し、つぎに明治以降の入会林野の衰退過程をたどり、最後に市民による森林管理の動向について検討することにする。

(中 略)

市民による森林へのアプローチと「コモンズの再生」

入会地(コモンズ)への市民のアプローチが盛んに行われているのは、イギリスである。

コモンズ利用のなかでも、依然として面積の上で大勢を占めるのはイングランド北部・南西部およびウェールズを中心とする地域における放牧地利用である。いわば辺境に位置するそれらの放牧地は従来から粗放な利用ではあったが、近年では写真に示

されるように、シダ類の繁茂などによる劣化も進んでいる。しかし、それらの放牧地は戦後の国立公園制度の発足によって、その指定をうけているものが多い。そこでは、ワイルドな景観が残されているが、そこが農林業という産業活動の対象になっているというイギリス田園景観の特色をも表している。

むしろ、市民のアプローチという点で脚光を浴びてきたのは、ロンドンなどの都市の内部や近郊のコモンズである。そもそもイギリスにおける入会権は日本の民法では地役権にあたるものであり、土地所有者と入会権者とは異なる。19世紀の中頃から、長年にわたり頑迷な土地所有勢力の反対を押しのけて市民が獲得してきたのが、だれもが利用できるアクセス権である。それによって、ローカルなコモンズはレクリエーション的利用のオープンスペースへと変化した。そして、管理主体が行政となったものが多いなかで、ニュー・フォレストは19世紀後半以来、農民によるブタの放牧権と国民のレクリエーション権が両立した上で、地元住民を含む管理委員会によって管理されてきた。このようなケースについては、単なるオープンスペース化ではなく、ローカル・コモンズの再生とみることはできないであろうか。

宮内泰介は、「コモンズの再生」をめざしているように思われる日本の里山活動の問題点として、①利害調整・ルールづくりは誰がするのか、②「生産」をその活動のなかでもちうるか、という点を指摘している。そして、①については「深く利用している住民が尊重されるやり方であるかどうか」が大切であるとされる。②については、「マイナー・サブシステム」を含めて「生活を支えるもの」でなければならない、「自然保護」というイデオロギーだけでは弱い、とされる。

日本の里山活動においては、地域住民が利用しなくなったり、手入れに困ったりしているところへ、「よそ者」として市民がアプローチしている現状がある。したがって、その里山自体においては、地域住民が必ずしも主体たりえない。「生産」については、宮内の指摘にあるように、財だけでなくサービスも

含まれる。と同時に、時代によって、「生産」の形態は異なることもある。つまり、それぞれの時代における「使用価値」とは何かが問われるのであろう。現在では、森林の公益的機能を高めたり、有用化したりする活動も含まれよう。土壌浸食を軽減するための間伐作業や環境教育などのことである。

むしろ、日本の里山活動において重要なのは、宮内のいう①と②を貫く「空間的・時間的なつながり」ではなかろうか。つまり、地域住民と「よそ者」とのつながりであり、伝統的ムラ社会による林野利用と「よそ者」による現代的な林野利用とのつながりである。

資源の共同利用地としてのコモンズは自然と人間という2つのシステムの境界に成立し、都市内の遊び場・会合地というコモンズも私的空間と公的空間との境界に成立すると、問宮陽介は指摘している。これにならえば、「コモンズの再生」としての里山は、上記の「2つのつながり」の境界に成立することが展望される。

「2つのつながり」におけるそれぞれの濃淡によって、実際の活動にはさまざまな展開がみられるであろう。ここでは、それぞれの「つながり」を濃くして、ムラ社会と結びつきを重視しながら伝統的な林野利用を実践している「森林塾青水」の例をとりあげてみよう。

「青水」は東京の入会慣行に関心のある市民グループが2000年に立ち上げ、群馬県水上町で木工家を介して地元集落との交流を始めた。2003年には水上町有林21haを借り受けたが、面積の約半分がミズナラなどの二次林で、残り半分がカヤ場である。古い時代の里山を想起させる林野の構成である。この地のカヤの一部は、今でも県内の文化財建築業者が屋根の修復用に刈り取っている。2003年秋には「青水」も管理小屋づくりのために、地元の指導でカヤを刈った。さらに、あまり利用されなくなったカヤ場は、樹木が生えてくるために、カヤ場としては劣化してきている。そのため、2004年春には、地元としても40年ぶりに、塾生・地元住民・役場職員・文化財建築業者など総勢47人によって、山焼きが行われた(写真参照)。

また、「青水」の特色は、「入会山の約束ごと」をつくらうとしていることである。権利、義務、罰則などが検討されているが、おもしろいのは借り受けた当該林野を「狭義のフィールド」、地元集落を「広義のフィールド」と位置づけていることである。つまり、「入会山」は集落の暮らしや文化と不可分の関係にあることを前提とする「約束ごと」にしようとしていることである。一方、地元側では、まず塾生として内部から「青水」の運営を支える人たちがいる。つぎに、地域資源の発見を目的としてつくられ

た「田園構想委員会」の高齢者グループが、ムラの歴史や地域資源について語り、伝統的な林野利用を指導している。こうして、「よそ者」と地元住民による濃密な連携や協働が、短期間のうちに深まってきている。

このような「2つのつながり」を志向する「青水」の活動については、イギリスのニュー・フォレストにも匹敵するような、日本型の「コモンズの再生」が期待される。



「青水」によって行われた山焼き (2004年撮影 撮影者・海老沢秀夫)

●2005年定期総会開催

2005年3月23日(水曜日)18時から20時、扶桑レクセル5階会議室(西新宿)にて、定期総会が開催されます。議事以外に、水上町藤原からお越しいただく林親男さんのご挨拶、顧問である滑志田氏による講話を予定しております。その後、都合のよろしい方と懇親会を行う予定です。

●森林塾青水第1回FS「ススキ草原の野焼き」

2004年度に引き続き、今年も講座「森林コモンズ村・ふじわら」をフィールドにて、全7回開催します。今年の森林塾青水のフィールドでの活動は、この講座コモンズと同じ内容で開催します。第1回は、昨年40年ぶりに再開されたススキ草原の「野焼き」。地元・藤原地区の野焼き経験者の指導で、延焼防止方法の研修を受け、約2畝に火を入れます。また、藤原地区の概要、ススキ草原の現況と草原再生の取り組みなどについて学びます。

◇と き(予定): 4月23日(土)~24日(日)・1泊2日

実施日は、現地の雪解けの程度や天候により、1週間前後、変更することがあります。4月初旬に決定し、参加者にお知らせします。

◇ところ: 群馬県水上町藤原上ノ原

◇集 合: 上越新幹線「上毛高原駅」午前9時30分、車の方は、現地午前10時30分

◇宿 泊: 藤原地区民宿

◇参加費: 8000円 宿泊費(1泊2日)+2食昼食

◇問合せ: 「森林塾青水」事務局=コミュニティ・デザイン内(浅川潔)

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷3-60-6-702 電話03-3408-8670

E-mail: sinrinjyuku@fiberbit.net ファクス03-5474-0847

◇申込み: ファックス、E-mailにて上記事務局まで。

◇締め切り: 4月8日

※すでにお申し込みいただいている方も、再度参加申し込み書(別紙)をお送り下さい。

参加者には後日、詳細スケジュールをお送りします。

●「森林の市」に参画

4月29(祝)30(日)、日比谷公園にて第22回全国「森林の市」が開催されます。当塾は、今年も水上町のテントに出展いたします。お手伝いできる方は、ご連絡下さい。

編集後記— 塾長のつぶやき —

●今年度7回目、最後のフィールドスタディ。主たる目的は、地元の皆さんとの「野焼き」事前打ち合わせにあった。話し合いの最後に、「いいですよ。やってみますよ」と地元代表の雲越萬枝(くもこしばんえ)さんが言ってくれた。低いが力強い一言。ほっとした、嬉しかった。

ススキ草原再生=よい茅(場)づくりの基本はなんと言っても、地道な野焼き(火入れ)と茅刈りの繰り返し。豪雪地方に固有の火入れの手法、先人の培った知恵を地元の皆さんとの協働作業を通して学び、継承していきたい。そんな思いから今回の打合せでは萬枝さん達のご意見を全面的に受入れ、池田さんのレポートにあるような日程、方法を採用することとした。地元の皆さんと我々よそ者(=都会もん)による参画・交流型のフィールド整備作業。その繰り返し、小さいけれどキラキラ光る茅(場)づくりと現代版入会(=日本型コモンズ)づくりのプロセスに他ならないのではなかろうか。

その夜、外は一面の銀世界。見上げると降るような星空だった。雪国にあたり前の光景だったけれど、我々にとっては記念すべき一夜だった。

●藤原中の雲越誠司先生の「藤原学」。一週遅れのトップランナーの鏡。エコミュージアム=地域丸ごと博物館の先取りとも言うべき「藤原博物館」の試みに感動。先生、転勤しないで!!

●雪原かんじき散策。最年少参加の柏倉祐吉くん(小3年生)、「楽しかった。また来たい」。最高齢の藤沢直一さん(82歳)、「おもしろかったまた来る」。

●我々が惣一郎さん上毛新聞に登場。自給自足の知恵を教えるとは嬉しい限り。藤原には他にも登場してほしい先達が大勢いらっしゃる。

●三井先生のご論考。思いもかけぬご評価をいただいてしまった。地元の皆さんにもお伝えして、共に汗をかきながらご期待に応えていきたいきもの。先生、野焼きにご来遊いただけますように。

人生に似たる 苦さや 路の臺

(青)

別 紙

送信先

E-MAIL sinrinjyuku@fiberbit.net

FAX 03-5474-0847

「森林塾青水」事務局＝コミュニティ・デザイン内（浅川潔）

出 欠 連 絡 票

第1回フィールドスタディに (右記のどちらかに○印してください)		参加します		欠席します		
お 名 前						
E-MAIL FAX番号						
○印 を付 けて くだ さい	月 日	朝 食	昼 食	夕 食	宿泊	交通手段
	4月22日(金) (前泊希望の方)					自家用車 電車(上毛高原駅・水上駅)
	4月23日(土)					自家用車 電車(上毛高原駅・水上駅)
	4月24日(日)					自家用車 電車(上毛高原駅・水上駅)
通 信 欄						